



 Data	2025-44
監督・脚本: 楊徳昌 (エドワード・ヤン)	
出演: ヴィルジニー・ルドワイヤン ／柯宇綸 (クー・ユールン) ／唐從聖 (タン・ツォンシェン) ／張震 (チャン・チェン) ／王啓讚 (ワン・チーザン) ／ニック・エリクソン／アン ドリュウ・ツァオ／ダイア ナ・デュピス／王柏森 (ワ ン・ポーセン)／張國柱 (チ ャン・クオチュウ)	

👁️👁️ みどころ

台湾で東京の新宿歌舞伎町に相当する、ちょっとヤバい都会が台北だ。楊徳昌 (エドワード・ヤン) 監督の名作『牯嶺街 (クーリンチェ) 少年殺人事件』(91年) は1960年代の台北が舞台だったが、舞台が90年代の台北になると、悪ガキ四人組は本作のような“生態”に？

他方、台北が国際都市であることは、フランス娘がかつての恋人を探しに単身、多国籍ハードロックカフェに乗り込んでくる冒頭のシーンからよくわかる。本作では、本作に登場する多種多様な登場人物たちの“生態”が興味深く描かれるので、1つ1つの物語の展開をしっかりと確認したい。

ストーリーの軸の1つは、四人組のボスと負債を抱えて雲隠れした父親との絆だが、父親を追跡するヤクザが絡んだ追跡劇は興味深い。まさに、急激な経済発展を遂げ多国籍の街となった台北を舞台にした、本作ならではの面白さだ。多くの物語を120分の枠内で要領よくまとめた楊徳昌監督の手腕に拍手！

————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

■□■ 『牯嶺街少年殺人事件』との連続性と異同に注目！ ■□■

楊徳昌 (エドワード・ヤン) 監督は、『非情城市』(89年)の侯孝賢 (ホウ・シャオシェン) 監督と並ぶ「台湾ニューウェーブ」を代表する監督、そして、そんなエドワード・ヤン監督の代表作が『牯嶺街 (クーリンチェ) 少年殺人事件』(91年) (『シネマ 44』184頁) だ。同作の舞台は1960年代の台北で、①国共内戦の敗北、②本省人と外省人、③長く続いた戒厳令と白色テロ、④「反攻大陸」のスローガンとプレスリーを始めとした洋楽へのあこがれ、を時代背景とした中で、『ウエスト・サイド物語』(61年)と同じように展開される、屈折した若者たちの抗争劇を描いた映画だった。また、同作は監督自身の体験と現実の殺人事件にヒントを得て生まれたものだが、対立する2つの抗争グループの1つである

「小公園」を率いる不良少年「小四」役を演じたのが、その後『グリーン・デスティニー』（00年）、『呉清源 極みの棋譜』（06年）（『シネマ 17』249頁）、『レッドクリフ Part1』（08年）（『シネマ 21』34頁）、『レッドクリフ Part2』（09年）（『シネマ 22』178頁）、『グランド・マスター』（13年）（『シネマ 34』484頁）等で「アジアを代表する俳優」に成長した張震（チャン・チェン）だった。

同作は、2つの抗争グループに属する、多くの登場人物たちの理解が大変だったが、「これはすごい！」という充実感と満足感が満ちていた。それに比べれば、同じ台北を舞台とし、同じ張震演じるホンコン（香港）を含む「四人組」を中心とする青春群像劇（？）たる本作は、時代が1960年代から1990年代後半に移行しているため、屈折した若者たちの心情は同じだが、時代状況は全く異なっている。また、ストーリーの軸が2つのグループの抗争事件を背景として生まれる殺人事件という物騒なものではなく、フランスから突然、恋人のマーカス（ニック・エリクソン）を追って台湾にやってきたフランス娘マルト（ヴィルジニー・ルドワイヤン）の恋物語（？）を軸としたストーリーだから、本作は『牯嶺街（クーリンチェ）少年殺人事件』とは全く異質な“作り”になっている。

なお、本作のパンフレットには、①筒井武文氏の『「四人組」の運命、あるいはエドワード・ヤンは台北の未来に何を託したか』と、②月永理絵氏の「反逆者たち」という2本の（クソ難しい？）コラムがあるので、これは必読！さあ、1960年代の『牯嶺街（クーリンチェ）少年殺人事件』の少年たちを、1990年代の台北に再登場させた（？）本作で、張震演じるホンコンを含む「四人組」はいかなる変化（成長）を・・・？

■舞台は90年代の台北！冒頭は軽トラの追跡劇から！■

東京では新宿歌舞伎町がアジア系を中心とした“無国籍な街”として有名だが、1990年代半ばの台湾では、台北がそんな街だったらいい。私は台湾旅行に4回行ったことがあるが、台湾南部の台南や高雄は昔の面影を残した雰囲気いっぱいだが、首都の台北は東京と同じような大都会で、その一部は新宿歌舞伎町と同じような無国籍な歓楽街になっているらしい。

本作冒頭は、急激な経済成長を遂げ、多国籍の街となった台湾の首都台北で経営する幼稚園チェーンが破産して、負債を抱えて逃走している実業家チェン（張國柱／チャン・クオチュー）を捕まえるため、ボスと電話で連絡を取りながら、ヤクザの黒道大哥（呉念真／ウー・ニェンツェン）と黒道小弟（王柏森／ワン・ポーセン）が、1台の軽トラを追うシークエンスが描かれる。軽トラの荷台にはチェンの息子レッドフィッシュ（唐從聖／タン・ツォンシェン）ら少年が乗っていたが、その軽トラは駐車していた1台のベンツに意図的に衝突させた後、荷台の少年たちは散ってしまったから、アレレ、アレレ。これでは追跡していた2人のヤクザは大チョンボ・・・。

■舞台は90年代の台北！その他の登場人物たちは？■

続いて、スクリーン上には、台北にある無国籍な客でにぎわうハードロックカフェの風

景が映し出される。そして、そこでは、

- ① ヘアサロンの新人、ホンコン（香港）（張震／チャン・チェン）が、カリスマ美容師のジェイ（趙徳）から、怪しい幹旋業者で今や大金持ちになっている女性ジンジャー（ダイアナ・デュピュス）とデザイナーの男マーカスを紹介され、
- ② ジェイとマーカスとの間で「外国人がなぜ台湾に来たと思う？自分の国にいられなくなったのよ」という会話が交わされ、
- ③ レッドフィッシュ、トゥースペイスト（王啓讚／ワン・チーザン）、ルンルン（柯宇綸／クー・ユールン）ら「四人組」が次々と店に集まり、
- ④ ジンジャーやマーカスそしてその恋人のアリスン（陳欣慧／アイビー・チェン）が飲んでいるところに、マーカスの元恋人のマルトがパリからやってくる、

ことによって、多くの登場人物たちの一通りの紹介が完了する。そんな中、ジンジャーは「ここは望みの叶う街だけど、恋が実る街じゃない」と手厳しくマルトに忠告したが、その後のマルトの行動と恋物語の展開は？

■□■四人組の絆の強さは？女も4人で共有！？■□■

私は、学生運動に明け暮れていた大学1〜3回生の頃、マルクス・レーニン主義と共産主義について学んだが、共産主義社会の最大の特徴は、土地、工場、設備、材料等すべての“生産手段”の共有化だ。もちろん、それによって生まれる生産物もすべて共有だ。ちなみに、法律事務所を共同で経営する場合、大きくは、いわゆる「原始共産制」に基づきすべてを共有し、すべてを平等に分配する型と、経費だけ共同化するものの2種類がある。

他方、共産主義社会でも、共有するのは生産手段や生産物だけで、婚姻関係で一夫一婦制が維持されるのは当然だから、妻の共有化や恋人の共有化はあり得ない。ところが、本作ではアジトに集まる四人組が、「すべて、みんなで分け合う」というルールの下で生活している姿が描かれるので、それに注目！

昨夜、ハードロックカフェからの帰り道、ホンコンは傷心のアリスンに近づき、アジトまで“持ち帰って”いたから、レッドフィッシュたちが「みんなで分け合う」というルールの下、アリスンに詰め寄ったのは当然だ。思春期の少年たちが純粋な考えを貫くのは当然だが、本作のスクリーン上に登場する「女もすべてみんなで分け合う」という、この四人組のルールは興味深いので、じっくり観察したい。

■□■レッドフィッシュの復讐劇は？ヤクザとの応酬は？■□■

他方、「お袋がイカれちゃった」という電話で、レッドフィッシュが驚いて自宅に戻ると、ヤクザに荒らされた自宅はひどい状態に。父親の雲隠れは、今回も「アンジェラという女の絡み」が原因だろうと直感したレッドフィッシュは、ホンコンが働くヘアサロンで偶然アンジェラという女を見かけたため、がぜん、アンジェラとその愛人である金持ちのチウ（顧賽明／クー・パオミン）に復讐計画を立て、実行に移すことに。さあ、その展開は？調子だけはいいのものの、あまり頭の良くない2人のヤクザは、追跡中のレッドフィッシュ

宛にかかってきた電話にルンルンが代わりに応対したため、ルンルンをレッドフィッシュと誤認したから、追跡劇は大混乱に！さらに、レッドフィッシュがやっと隠れ家にもっている（？）父親に出会うと、そこにいた女はアンジェラではなかったから、アレレ、アレレ。さまざまな思い違いがスレ違う中、物語はあらぬ方向へ・・・。

■□■乙女の危機に注目！四人組の思惑は？■□■

前述した“青年ギャング団”たる四人組の固い絆は興味深いが、「女も共有」という原始共産主義的な思想はいかかなもの？そう思っていると、続いては、せっかく台北まで恋人のマーカスに会いに来たのに、あっけなく振られてしまったフランス娘・マルトに対して、レッドフィッシュが親切心を出して（？）、ホテルを引き払い、アジトの一部屋に泊めてやるストーリーが登場してくるので、アレレ、アレレ・・・？これって本当の親切心なの？それとも一種のスケコマシ・・・？

台北で一人暮らしをするために仕事を探そうとする純粋無垢なマルトに対して、レッドフィッシュは、『俺たち任せろ』と善人のふりをしていたが、その展開は？レッドフィッシュの狙いはジンジャーにマルトを高く売りつけることだが、マルトに娼婦の仕事を紹介することができないルンルンは、「アジトから消えた」と嘘をついて、マルトをかくまったが、それは一体なぜ？そして、そんな裏切り行為をしたルンルンの運命は如何に？

■□■父と子の絆は？男女の恋模様は？四人組の結末は？■□■

屈折した少年たちの抗争劇を描いた『ウエスト・サイド物語』（61年）は、私の中学時代の忘れ得ぬ傑作だが、本作は四人組の成長物語と男女の恋模様、そして父と子の絆等の物語をバランスよく配分しているので、その分お楽しみも大きいし、ストーリー性も豊かなものになっている。

導入部では謎に包まれていた父親チェンが、意外にも女と一緒に豪華な隠れ家に住んでいることを知った息子のレッドフィッシュは、その後、ヤクザに追われる父親に対してどんな対応を？また、二転三転する、フランス娘・マルトと元恋人・マーカスとの恋模様の結末は如何に？さらに、何とも意外な父親の死にザマを目撃することになったレッドフィッシュは、そのあまりに清らかな姿に、父親を大悪党の手本としていたそれまでの価値観が崩壊してしまったが、その立ち直りは？さらに、必然的に四人組（のリーダー）から離れてしまったレッドフィッシュに代わる新たなリーダーは誰に？

本作後半では、そんなさまざまな人間模様と興味深いドラマがスピーディかつ小気味よく展開していくので、それに注目！楊徳昌監督の青春群像劇の素晴らしさに拍手！

2025（令和7）年5月6日記